また、定年後も継続雇用制度により65歳まで働ける環境になりましたが、たとえ私と同じ70歳になったとしても、まだまだ働ける年齢ではないかと思います。一つの職場で20年30年仕事をしてきた人というのは、いろいろな技術的な面、知識の面で、入社したて人よりも優れたものを持っているわけですから、それぞれの企業が、そういう宝物とも言える人材を大事にしていくことで、人材の流出を防ぐという事にも繋がっていくと思います。

「中心市街地および地域の活性化について」

【司会】

地域経済が縮小傾向にあるのは、少子高齢化にその第一の要因があるようです。ここで、三市の中心市街地、中心商店街についてお伺いしたいと思います。

【永澤会頭】

私は、東京方面へ行くたびにその人の多さを羨ましく思ってしまいます。やはり、人が集まる場所でこそ商売が成り立っていくのではないかと思ってしまいます。

弘前は一時期、中心商店街である土手町で空き店舗が増加し、駅前の大規模商業施設も閉鎖してしまい、惨憺たる状況にありました。

このような中で、土手町では土手町コミュニティパークができ、隣接する駐車場でランチタイムに３時間の無料開放を行っています。その結果、無料の時間帯以降も駐車する人がいることから、逆に収入は増加しているそうです。

これほどに自動車での移動が多くなってきた今日では、駐車場の確保等、車で来やすい環境を用意することも大切だと思います。

また駅前地区でもヒロロの開店以降、飲食店を中心に賑わいを見せています。また、隣接する土手町と駅前・大町をつなぐ「えきどてプロムナード」で、マルシェ等のイベントを開催し人の賑わいを創出しています。

弘前市民の皆さんが「こうしてはいられない」という危機感を持って動いていただいた結果だと思います。今後は、仕事が終わってから中心商店街を歩く人が増えてきているので、そういった人たちが街を巡れるようにはたらきかけて行きたいと思っています。

商工会議所、商店街の方々、それに行政が、三位一体となって頑張っていかなければ、この難局を乗り切れないと思います。少子高齢化も含めて、我々は地道に前向きに努力を続けていかなければならないという覚悟をしているところです。

【司会】

山崎会頭、市街地の賑わい創出について、いかがでしょうか。

【山崎会頭】

五所川原の中心市街地の要
立佞武多の館

五所川原の場合は、中心商店街と呼ばれたエリアは、商業的には低迷しています。

これはやはり車社会が進展したということに伴って、消費者の買い物のスタイルが変わってしまったことが原因ではないかと思います。消費者に合わせた商業集積の形がショッピングモールを中心としたものに変わってきています。

また後継者がほとんどいないという状況の中で、商売を継続できなくなったということもあって中心商店街とは呼べなくなっていると思います。

ただ、五所川原駅前に限っては、中心商店街とは呼べなくとも、まだまだ中心街ではあり続ける可能性は高いのです。

青森がコンパクトシティという名前を使っていますが、県内では五所川原が一番コンパクトシティだと私は思っています。駅から１キロ四方くらいのところに、まち機能が全部集約されているのです。

商業機能がエルムを中心としたエリアにシフトしているので、いわゆる中心商店街ではないけれど、中心街としての役割は十分果たしていけると思っています。

現在、五所川原では立佞武多の館周辺が中心街となっています。その周りに、来年７月に第２の集客施設として「まちなかパーク」の建設が予定されています。それに合わせてこれまでになかった地元ＦＭの開局を進めています。

それから市では、西北五の中核病院として来年４月の開院を目指して「つがる総合病院」の建設を進めています。これによって医療・福祉の中心が中心街にできるということになります。その後、市庁舎の中心街への移転も計画されております。

医療や福祉、行政サービスなどが集約した中心街という形が段々はっきりとしてきています。そうなるとそこに暮らす人に向けた商業施設などが必要になって来ます。この様な流れで活性化を図っていくという図式が見えてきています。

現在では行政がたいへん積極的な投資をしていますので、今後は商工会議所も一緒になってまちづくりをしていきたい。そうする事が中心市街地の活性化に繋がっていくものと思っています。

【司会】

はい、ありがとうございます。村上会頭いかがですか。

【村上会頭】

中心市街地活性化への取り組みとして、今から24年前に青年会議所20名で「こけしの会」を立ち上げ、まちづくりに取り組みました。

2000年にこの青年会議所と商工会議所青年部を中心にＴＭＯ「津軽こみせ㈱」が設立されました。現在、同社は法改正によりＴＭＯとしての機能はなくなったものの、黒石市の指定管理者として、まちづくりの活動拠点「津軽こみせ駅」を運営し、重要な役割を担っています。

しかし、カネ長デパートやジャスコといったショッピングセンターもなくなり、唯一地元のデパートであった、大黒デパートも現在休業状態にあり、市内には大きなショッピングセンターが、ほとんどない状態です。この様な中で中心商店街をなんとか活性化していかなければなりません。

希望があるのは、観光名所となっている「こみせ通り」です。現在、料亭であった「旧金平成園（澤成園）」という庭園や銭湯であった「松の湯」の再生に着手しています。これらが完成すると、「金平成園」から「松の湯」の間にある“こみせ”を活かして、中心商店街の活性化に役立てるものができるのではないかと思っています。

こみせ通り活性化の中核
松の湯

さらには、空き店舗の活用についても計画していかなければいけないと思っています。

「北海道新幹線新函館開業について」

【司会】

ありがとうございます。それでは、話題を少し変えまして、北海道新幹線が平成27年度に開通する予定です。

これにより観光客が函館への往復で青森県にも、津軽に寄っていただけるようになると思いますが、開業に向けた展開についてお伺いしたいと思います。

【永澤会頭】

当所では、平成23年４月に函館商工会議所と「津軽海峡観光クラスター会議」を設立し、様々な交流事業やビジネスマッチングを展開してまいりました。その中で函館商工会議所松本会頭との個人的な信頼関係を築くとともに、副会頭や専務理事同士の交流等強い信頼関係を築いてきました。

実は、函館の方々から、北海道新幹線が開業したら函館から津軽へと観光客を誘導してほしいというありがたいお話をいただいています。そのための色々な方策をお互いに講じようと、「津軽海峡観光クラスター会議」に磨きをかけようと相互に連携をとっているところです。

その成果のひとつとして、交流事業では、平成24年度より「はこだてクリスマスファンタジー」に「ひろさきナイト」という日を設けていただいて、葛西市長をはじめ、数百人の弘前市民が函館に行き、金森赤レンガ倉庫で合同で実施しています。

また、ビジネスマッチングの成果として「ラグノオささき」さんが、オリジナル商品として赤レンガの倉庫をイメージしたお菓子「金森赤レンガ倉庫のキャラメルガトー」を開発、製造したり、当所の常議員であります「六花酒造」さんでは、道南の昔のお米を使った「ガスバリ2013」という函館銘柄の地酒を造ったりと会員同士の密接な関わりが始まっています。

はこだてクリスマスファンタジー
ひろさきナイト

今後はこの関係をもう少し進展させていきたいと思っております。

そして新幹線の開通後は、弘前単独ではなく、津軽一円での観光を考えたいと思っています。

【司会】

山崎会頭、太宰治の人気というのは廃れることがないのですが、旧金木町を中心とした奥津軽観光と函館とのジョイントについては、どうお考えでしょうか。

【山崎会頭】

結論を言うと、今永澤会頭がおっしゃったとおり、五所川原だけの魅力だと、わざわざおいでいただくものではないだろうと思っております。

確かに太宰治のファンは根強く、他にも立佞武多がありますが、立佞武多の館と太宰の斜陽館だけで観光として成立させるのは難しいと思います。したがって青森、弘前、黒石も含めた連携というのが、これから大事になってくるのではないでしょうか。

五所川原単独ではなく、津軽というイメージ戦略をもっともっと売り出していく必要があると思います。

青森県人が考えている以上に、都会の人にとって津軽は魅力的な場所だと捉えられています。ただ受け入れ態勢ができていないというのが実情だと思います。

五所川原では、東京圏だけではなくて名古屋等の中京圏に津軽の売り込みをかけています。

津軽をイメージ作りのキーワードに津軽というものが売り物になるような中身の充実を図ることが大切だと思っています。

【司会】

ありがとうございます。黒石のほうではＢ級グルメとして「つゆやきそば」を展開しておられますが、これらについていかがでしょうか。

【村上会頭】

先般、愛知県豊川市で行われたＢ１グランプリで黒石の「つゆやきそば」は10位入賞できませんでしたが、大きな成果をあげてきたと思っています。

また、ハワイのホノルルでも青森県のグルメとして、十和田の「バラ焼き」、八戸の「せんべい汁」、青森の「しょうがみそおでん」、黒石の「つゆやきそば」の４団体が青森フェアを開催して宣伝してきました。

今、「やきそばのまち黒石会」が活発に活動し、「つゆやきそば」を目当てに来る観光客の方もいらっしゃるようになりました。今後もっと研究開発することでＢ１グランプリのゴールドまで行けるのではないかとも思っております。

新青森駅が開業したときも、黒石までのシャトルバスを駅の前に配置しましたが、思うような効果が得られませんでした。

北海道新幹線が開業した時には、函館から青森、そして弘前へ来てもらい、黒石は弘前と連携し、観光ルートを作っていければと思っています。その中には田舎館村の「田んぼアート」なども加えて、それを目的に来る観光客を黒石へ呼び込めるような仕掛けも考えられると思います。

当会議所では、昨年から隣接する田舎館村や平川市と連携し、「ナビチャリ」を活用した滞在型の広域観光可能性調査事業に取り組んでいます。今やメジャーとなっている「田んぼアート」、「盛美園」などを経由し、伝承工芸館へと向かうルートを創ろうという計画があります。

今後このような仕組みをもっと検討して、弘前や五所川原に来た観光客が弘南鉄道を使ってでも黒石の方に来られるような環境づくりを、一緒になってやっていければいいと思っています。

「今後の連携の可能性について」

【司会】

今、山崎会頭、村上会頭から三市の連携プレーについてのお話がありましたが、永澤会頭はどのようにお考えでしょうか。

【永澤会頭】

全くそのとおりだと思います。五所川原会頭の山崎さんも津軽という“面”で考えようというお話でした。まさに葛西市長も我々も全く同じ考えです。やはり津軽全体を回っていただければ、どこかに宿泊していただけると考えております。

例えば、黒石の「中野もみじ山」と「弘前城菊ともみじまつり」を組み合わせるツアーや弘前ねぷた、五所川原立佞武多を組み合わせたツアーなど、津軽地域を“面”として楽しんでもらえるような仕組みづくりが必要だと思います。そのためにも我々の連携が大切だと思います。

【司会】

「津軽三市商工会議所会頭に聞く」と題し、三会頭にお話を伺ってまいりました。

工藤　武重委員長（司会）

今年は、各商工会議所にとりまして更なる躍進の年となりますとともに、この座談会を機会に三商工会議所が共に手を取り合い、津軽一円の発展、活性化に向かう始まりとなればと思います。本日はありがとうございました。

今後の三市商工会議所の連携を確認！